修士論文完成までの日々

大　島　香　織
（別府大学司書講習事務室〔臨〕）

大学院修士課程を修了して、はや２年が経とうとしている。大学院での３年間は、特に２年目から３年目にかけて、修士論文を完成させるという目標に向かって突き進んできた時期である。その時期は、これまでの学生生活のなかで一番慌ただしい時期だったといえる。

ここでは修士課程３年間を振り返り、修士論文完成までの過程について述べたいと思う。

修士課程１年目

１年目はとにかく、自分の今後の研究テーマについて模索していた時期である。大学の卒業論文では、ルネサンス期の特にヴェネツィア派に注目しまとめたのだが、この時点ではまだ研究といえる域に達しているとはいえなかったため、大学で学んできたものを基礎としながらも、それを発展させる必要があった。

そして修士論文のテーマすら見えていなかったため、今思うとかなり回り道することもしばしばだった。一つの資料を紐解くと、必ず数カ所は疑問に突き当たる。その疑問一つ一つを解明してゆく作業に入り、ふと気がつくと本来何について調べていたのかさらに疑問が深まってしまったこともしょっちゅうであった。

修士課程２年目

２年目では、１年目で行ってきた研究が終わるはずもなく、前半は１年目とほとんど同じ事を行っていた。ただ違うのは、後半で修士論文へとつながる研究テーマがおぼろげながら見えてきた時期である。

すなわち後半では、修士論文へと直接つながる研究として、大学生の時の風景画についての研究を基礎とし、その風景が制作当時の風潮や思想に多くの影響を受けている作例として、貴族による月暦図とその様式の変化に注目することにした。

さらにその中でも、ベリー公による『豪華なる時禱書』とフェラーラのスキファノイア宮の一室に描かれた月暦図をあげ、両者を比較することにした。この２つの作例を比較することによって、中世からルネサンスへと時代が移り変わるにつれ、それとともに月暦の形式が変化する過程について明確に知ることが出来ると考えたからである。

これら二つの月暦図について、講義の中でも発表を行ったのだが、２年目の後半になると質問をする他の大学院生の目つきが鋭くなったことを覚えている。１年目や２年目の始め頃には、大体どのような質問があるか予測することができたのだが、この頃になると、他の院生も修士論文を意識しているせいか、予想外の鋭い質問が出されるようになった。それらの質問が恐ろしくて、自分の発表が近づくと、気晴らしのお笑い番組を見ていても笑えないような状況に陥りがちだった。発表原稿を書きながら、同時に大学院生一人一人の顔を思い浮かべながら、各々の専攻分野や趣味なども考慮して質問予想をした。しかしそのような緊張感があったからこそ、全力で発表をすることができたし、ひいては修士論文を書くことができたのだと思う。

修士課程３年目

修士論文を２年間で書き上げて修了するという道もあるのだが、私の場合、修士論文を書く上での調査、研究に２年間を費やしてしまったため、あと１年かけて論文を書き上げることにした。

４月から６月までで、論文に必要な資料収集を一応済ませ、夏休み前までに目次を作成した。そして、夏休み以降12月までに１ヶ月１章のペースで書き上げていった。この頃のスケジュールは、筆の遅い私にとってとても厳しいものだった。締切りの月末になると、何とも言えない絶望感にさいなまれることも多々あった。「書けない！」。ただ一言、この言葉が頭の中いっぱいになる。そんな辛い思いをしながら、どうにか11月末、最終章である３章を書き上げることに成功した。予想外に、計画どおりに進んでいたので、いささか幸せな気分で先生の研究室のドアをたたく。書き上

げた３章を提出し、「ああ、あと結をかいたらおわりだ」などと気楽に考えていた。ところが、チェックの後に発せられた先生の言葉を聞いた瞬間、幸せ気分も吹っ飛んだ。
「もう一章必要なんじゃないかな？」

その後、しばらく悶々と悩んでいたが、考えてみたらもう１２月。締切まで時間がないのである。「卒業したい」というその気持ちだけで立ち直れた気がする。

パソコンの前に座り、まず目次を修正し、第４章を加える。内容については、先生のアドバイスとこれまでの調査ノートを参考にして、とにかく書いた。というか、書きまくったといった方がよいかもしれない。ひととおり書き終えて見直してみる。やはり急いだ文章のため、かなりおかしな表現や誤字、脱字が目立つ。この時点で、かなり泣きそうな心境であったのだが、「これを書き終えたらテレビでも見るぞ」と不謹慎ではあるが明るい目標を胸に訂正作業へと移った。

このように、バタバタした状況を何とか脱し、結果的に他の章に比べてやや量的には少なくなってしまったものの、最終章を終える事ができた。

この後、結をまとめ、提出まで修正やら図版の準備やらに追われることになったのだが、壁に直面したら、担当の先生に指導していただき、同じく修士論文を書いている他の大学院生に意見をもとめ、互いの論文について話し合いつつ何とか論文完成の日をむかえることができた。

これまで大学院での３年間を駆け足で振り返ってきたが、１年目は研究テーマを模索していた時期、２年目で修士論文の内容がほぼ決まり、３年目で論文をまとめるという流れであった。だが、ここであげたトラブルはほんの一例にすぎない。ほぼ毎日、問題を抱えながら過ごしていたのだが、紙面の都合上、すべてを紹介することができないのが大変残念である。

そして、論文を完成させた時点でも不十分な部分も多い。論文のあちらこちらに書いているが、今後の研究課題がまだ山のようにある。

しかし、多くの問題を抱えつつも、四万字にもわたる修士論文を仕上げることができたのは、担当の先生方をはじめ、おなじく修士論文へと挑んだ大学院生の存在があってこそだと思う。心から感謝したい。

今後は、修士論文を書くうえで得た暦の知識を踏まえながら、西洋のみならず日本の暦についても研究をしていきたいと考えている。